祖父を通しての出会い

吹田市立第一中学校
３年　袈川　汐音

先日、私の祖父は他界しました。祖父は、筋萎縮性側索硬化症（ALS）という国の指定する難病の一つを患っていました。この病気は、全身の筋肉がおちていく病気で、最終的には自分でご飯を食べる事や、着替える事、食べた物を飲み込む事、呼吸をする事が出来なくなります。在宅で介護を受けながら生きていく事はもちろん出来ますが、祖父は病院に入院し介護を受けていました。

私は、祖父を通して、ある一人の女性の言語聴覚士さんに出会いました。私は、彼女のおかげで、この言葉を初めて聞き、この仕事を初めて知りました。

言語聴覚士とは、音声、言語、聴覚に障害がある人に対して、助言や指導をします。また、食べ物や飲み物の飲み込みが悪い人に対しても、助言したりします。祖父は、主に言語と嚥下機能を彼女にみてもらっていました。

彼女は、祖父や私たち家族を一番に考えてくれて、まるで家族かのように接してくれていました。いろいろと食べたい祖父と、食べさせてあげたいと思う私たち家族の気持ちをくんでくれて、いろいろと挑戦させてくれようとしたりしてくれました。また、祖父は人工呼吸器をつけていたため、声を出す事が出来ませんでしたが、呼吸器を少し調整して、声を出す練習をしてくれたり、その声を私たち家族に聞かせてくれたりしました。また、桜の季節には、お花見に連れ出してくれたりもしました。その時の写真は、今も家に飾られています。

祖父と彼女は、とても仲が良く、一日に一回は病室を訪ねてくれていました。祖父も、彼女に会う時は楽しそうで、嬉しそうで、見た事のないような優しい笑顔を見せてくれました。祖父の病室には、彼女と二人で撮った写真が飾られていましたが、その祖父の顔は満面の笑みで、その写真を見た私たち家族も嬉しくて笑顔になるほどでした。

ある日、私が祖父のお見舞いに病室に行った時、彼女が訪ねてくれました。彼女は私に「おじいちゃんのためにここに来たと思ったやろ？違うねん。うちがおじいちゃんに相談して癒されてんねん。内緒やで(笑)」と話してくれました。そう話してくれた事は嬉しかったです。患者としてだけでなく、祖父の事をちゃんと一人の人として、いつも接してくれている事が伝わったからです。その様子を祖父も嬉しそうに笑い、また、彼女が訪ねて来た時は、何かあったのかと、彼女を心配するような顔を見せていました。まるで、友達のようです。障害を持っている事は祖父の性格を控えめに、遠慮がちにさせていたような気がしていましたが、彼女と友達のようになれた事で、自分も頼りにされていると感じれた事で、祖父には笑顔が増えたような気がします。

患者と先生という立場だけでなく、祖父と彼女が見せてくれた、お互いを一人の人として認め合う姿勢を持つ事で、時に同じ目線で話す事が出来る人がいるという事が、どれほど安

心できるかを感じる事が出来、学ぶ事が出来ました。

　私もこれから沢山の人と出会っていくでしょうし、片寄った見方をせず、尊重する気持ちを持って接していきたいと思いました。